

淀屋形金雞新話

後編

特別
13
3521
10



明治七年 改之

門番 13
號 3521
卷 10

浪花縣令依問之助
津明白一取裁判仕
者也

昭和二十九年
七月十日
購求



浪花縣令
金雞新話卷之十

道八迫小笹

東武 岳亭主人 戲編



古人曾て云る言あり 翠の羽を以て自ら残ひ亀の智を以て自ら害ありと旨るる吾妻とのひ小笹とのひ甘大身美
標をめて却てくさくさの然火害を杜いぬ小笹の經紀波が
通心めて東国の人小身をまうせまうさうん約束して三百
両の黄金をえて立地ふ衆轡ふのりて八幅小行滝五郎が
妹ありと偽る曲編の者ら小三百両の黄金をこころ吾妻が
身の代をわがるひ滝五郎忠作らが雛鳥をほくひ落して再

金雞新話卷之十

壹

こひ轡くわのりて通夜とよ難速なんそくふ帰かへりたると夜よの忽たちちり小明せみ通とほて
吾家われがふ入いるる己おのの時ときむらりふぞ有ありるる小篋せき我家われがふあへりて
其その伴とも房ふふりりて一封いつふの文書ぶんしょをまじりめおれた終おひ日ひ涙なみだふる
たそしる冬ふゆの日のいと短せきくて頃やがて夜よるふるるるの彼かの経きん紀ぎ人の
波なみ安やす小篋せきを迎むかへふ来きりたるを小篋せきの閨わ室やより立たち出いでて衣服いふく
よろろふ拙ちが繕つくろひ婢めかけ女にをよびて一封いつふの文ぶんを把とりて妻つまの心こころよ
アは伯母おば御ご前まへの方かたまで琵琶びわ法師ほうしはふ行ゆるる父ちち君きみ政まさの
玉たまつらつらけを進ませて是これよとてとらるる婢めかけ女に何なにの心こころ
もつら経きん命めい心得こころえたるぬとけ文書ぶんしょを受うけとりおれた経きん紀ぎ人ひととて
小篋せきを伴ともひけ死しを立たち出いでて道みちのそと二里にりをうりも行ゆりたる時とき爰こゝ

小信せいのこ田屋たやとのつら一軒いっけんの旅舎りやあり波なみ安やす小篋せきをひいては旅舎りや
めりり呼よ門かどをもよこそで困こづ々と奥客おくきやく次つぎへとちの最もおくまらる
一室いっしつふ入いぬけ一室いっしつの裡うちぬいたるる雇ひやう風ふうひた廻まわり其そのうち小
襦す袢たんとれた衣えを引ひきたる枕まくらニツ双ふたへおれた二人ふたりの男おとこ座ざ居ゐ
らり経きん紀ぎ人の波なみ安やすまへ前まへふりりては男おとこの耳みみ小口こぐちさしよせ何なに事こと
をり私わたくし語かたらん頭あたまて小篋せきの手てをとって裡うちふ引ひいた昨日きのう三百
両りやうの黄こが金がねを給たまりたる御おん方かたのけ客きやく人ひとふておまじりまはさるる
のあやふら小篋せきのお伽がたをまじりあひひと小篋せきをまじり小推せきおりては
小篋せきの其その身みを割さりて心地こころち彼かの照てう君きみが胡こ国こく小せき到たうるあひひめて
波なみ安やすふあさるて詮せん術じゆつるる怕おそくと前まへのそでまじり彼かの旅り人ひとの顔かほを

どうも何死やらん見覚えある面体どうも色は熟らと考へ見
ろよ思ひきやけ者のいこむ井戸屋滝五郎家の番頭道八
ふてありろろ小笹の胸に駭けて女時忙せて居ろろ
勿心ろ小聖言つて云ろろやう你の井戸屋の老頭道八ろろはや假
令何万両の黄金とつても你が心小従ひろろ妻今より帰ろ
ろろと通と立て外面の方小出んとほろろを波女に駭き扯らむろ
を振放ちて行んとほろろ彼旅人立上つて小笹とろろへて引戻し
道八奴心つて謂て曰く你が身体昨日二百両の黄金とろろ
買受ろろ體ろろ今則ちろろ物ろろ然ろろ今吾心小従
ひろろとて逃出さんとほろろ畢竟とて二百両を奸謀とろろ

盗人と云つべし速ろろ心静めて吾国の伽とろろ然ろろ
三百両の黄金をかへほろろ奈何二こと迫つけろろ小笹の吁
とははいご一儲もく云とて云ろろ物ろろ偷まろろけろろ
你が支度と汝滝君ふさるるの悪支とほろろ五口妻の徒良金
ろろろろ三百両の證金のとろろ七百両を掠めとり其上井
戸屋の宝藏小まのびらり二千両の黄金とろろ父君を
倒して逃失ろろ汝こそ大盗人ろろ今より妻をとりて
家小返さろろ汝をも助けて知ほろろて過ほへく倘又それを
爲ろろとろろと妻今より縣令小訶へて汝を搦めとろろほ
く奈何とも返辞せせよと云ろろ道八いよ怒つて曰く吾

金住竹古春

二頁

とて大盗人と云を汝も三百兩の揚兒ふて俗小死語盗
人の上まへ把と云のまう御小も云るごとく三三身三三の吾三三
へ買とらるる三三せち小家小飯三三んと思三三り三三二百兩を返して飯
を然せぬ間の汝を一寸も動三三う三三は三三べ三三と云三三る三三が小笹三三が三三
やう三三休三三小何時の三三と金三三を借三三る三三や妻更三三ふかへ三三は三三べ三三れ三三實三三え三三
と三三の道八眼を三三む三三れ三三出三三昨日は波女三三ゆ三三せ三三て三三二百兩三三休三三
方小贈りつ三三つ三三既三三小汝が手三三して受取三三が三三れ三三まで三三越三三せ三三し三三小
右三三ばやと云三三バ小笹吞三三へて其三三三二日兩の昔金三三の妻が丈滝君の
金三三を三三掠三三め三三た三三ら三三る三三ま三三昨日三三其三三中三三を三三妻三三が方三三へ三三二百兩返三三せ三三
る三三尚三三其三三残三三り三三も三三疾三三々三三お三三こ三三せ三三休三三が方三三へ三三やる三三金三三とて三三一三三待三三て三三有三三

此の人の道八の堪三三うか三三小笹が髪三三を三三ひ三三れ三三相三三ぞ三三散三三々三三ゆ三三打三三
居三三る三三小笹の口三三の音三三は三三泣三三き三三び三三々三三ゆ三三ぞ三三姪三三犯三三人三三婆三三の三三り三三推三三方三三り三三道
八三三と三三さ三三る三三ぐ三三和三三り三三辛三三う三三と三三髪三三を三三握三三り三三一三三拳三三を三三引三三き三三ち三三ら三三
を小笹の彼方へ三三撞三三ら三三う三三尚三三の泪三三小沈三三ま三三る三三道八の瀆三三生三三口三三と
平天三三怒三三り三三て三三罵三三り三三ける三三女三三の透三三間三三を三三伺三三ひ三三て三三小笹の肉三三ア三三と三三
躍三三り三三た三三外三三面三三の三三く三三入三三走三三り三三出三三何三三死三三と三三も三三く三三逃三三去三三ら三三う三三道八三三見三三
る三三ら三三太三三の三三小三三駭三三死三三姪三三犯三三人三三婆三三と三三る三三角三三一三三同三三く三三外三三面三三へ三三走三三り三三出三三
小笹が迹三三を三三踏三三後三三て三三遁三三さ三三し三三め三三と三三馳三三行三三ら三三
小笹三三投三三副三三盗三三
半夜舟を廻三三して楚御小入月明三三り三三ゆ三三て山水三三共三三小女三三君三三ら

金維新活巻二之十

肆



今維新古卷之七

二二



今維新古卷之十

七

吾へて云我のけるどまで雑波のうらの縣今大滝とのけは
うらぎさこやん
再度おどろ紀思ひやう借けけ者も悪人小て去垣井戸屋
を没収し滝君を追放るゝ佐和弥太小て有るうと心
の裡小曉りるぐゝ又のめやう今君の捨言兒の中小て雑の
ゆきそゝの如何るる更小て侍る小やと問々も佐和弥太言
へてのやう是のめの井戸屋の家の重宝する黄金の雑る
まけのめ仔細ありて今小吾手小ゆりぬ竹一遺小死人ある
とたの勿心つけようまを登りて鳴るうと語りたるふぞ小笹ま
はく不審とまする頃吾家の奴子得平忠八を殺して昔

金の雑をうをひ逃去ると云わせーが借の是も佐和弥
太が死鳥小て得平忠八二人を失ひけ金雑を奪ひとら
小疑ひるゝと心中密小思ひ多う佐和弥太小笹小向ひく
のやう汝這奴小勾引されて己小其身をも汚さるべかり
しと時よく吾爰小未かりて其雑鳥をほくひら其思
と思ふまゝバ今よう汝らと妻とらう吾と僕小連立て東国
小下ゆととのひくるふぞ小笹のたの小忙を惑ひ一とび鱈
肥とのがと再度虎世小入がごとく如何のせんと思ひ一が漸
々心を治めて云やう願くは君らとハをうて一度浪速小返
しひ父と能高議しひ其後ともかくも為め人と云け

金雑行名集

せむ佐和弥太のめやう吾の白昼小浪速の地を歩行
 こ切の尻然を休ぐ家小のころ難し今よう夜とくも東
 の方小起くころ不夫来とて手をとりて引立行んとすけ
 ろと小笹が悲しきやう方多く大舌あけて打泣く身と道
 んと駈出ほを然させと引止るはた一邊の松の下小忽然
 として細き笛の音のさくらふど佐和弥太の不測小あ
 彼方き吃と見返りたる盗賊とあやしれた大男の思もこ
 ろ打扮ふて大長刀をぬれそを呼子の笛とせ頼らうたり
 佐和弥太何とら狼狽かん勿心ち刀をひね抜て彼偷賊小伐
 てうろ盗賊の長刀小て二打三打あひくらす時うろ一邊の山

うげうろ五人三人七八人とあひく小見ゆので二三千人の
 ども佐和弥太ひを把圃そで火花とちうして戦ひけ
 了然ども身小敵しうた教のぞく佐和弥太のつ
 ひ小刀を打落さるを俯臥小倒さるをよのの偷賊ども
 をり重りて繩をうけ高手小手小あひるしめろ小笹の御向小
 さを伺ひ一散小逃ひてうろ小賊四五人追うけまり小
 笹をとて入て猿轡と食せ同く小手を傳めて二人の大男
 こんを背あひ彼佐和弥太を引立て擔見黄金の難
 と小賊小打荷せそれより山間へ巡りり谷川のちりり
 傳ひ行て凡そ十里をり斯て一座の太山小のり九曲折る

峽路をのりりて天の明る頃をひと最重なる任官
ゆる山寨の裡小入りたる寔ふと丹の色を合ひてめを
磨き石の能を抱くをめて所を碎くと古人も云り
揚を人の折まや揚の仇のさくらうらや、嗚呼は小笹の女
くは世小面美うたむと却りて方般の災害小あひぬ美あま
いれ人の美面六谷ゆでありたる

小笹屋謀計

宅原高毎には夜くらてより家小岐の婢女が小笹が文書
さゆりけると把上てひりた刀を小吾身を妻給まふりて
二百両の金とのへ吾妻が落藉の拜入り金とあがるひ其の身

遠くは自害はぐとる書むたふて有々も高毎の仰ま
色を放ちて泣きけびぬ斯るこそ入八幡より忠作慌忙
走り来り高毎の逢て昨夜の爲体をつぎふ語り小笹か
トおと止めんとて来りよと云々も高毎のるが死きの中
小力を得て去り疾小笹と尋ねるごとく忠作と打つれ立て
経死波女が家小行んとて走りたる死小端なく途小彼波女
行遇り高毎波女を引と入て散々小言り吾娘は何処ある
ぞ疾のへくと追めたる波女のひとほり打震ひつ、旅舎めて道
八と小笹が争ひて竟と未々く語り然るて小笹の御、東を
さして逃めひや道への跡より追め侍のれと比自まよひぬ高

無忠作波をさるる人突放ち東をさうしてぞ追行るる其の夜
 五六里の間をひらき居る小尋の巡るるものも竟小笹小回して
 逢は却て道八が伐して休らるを見付しよくは是をさる
 勤る小の多ご死き居て呼死居るるもの忠作の近死不
 ちの賤が家小の古き戸板を一枚ゆりの是小道八を換
 衆て四五人の人夫を雇ひ難波をさうして荷のせくる領て縣
 令小訴へ出たるは縣令大滝左門の佐医師の命かして道八が
 小笹を縫せ糸をさへて夕抱せさせま直勤の追てはへたる
 と高と舟と忠作をを飯さるる却て説かの小笹と佐和弥太
 を縛めて連行する教友の盜賊へ何者ぞと思ひく小是則ち

彼小仏太郎といふ副盗の魁首なる大和の国葛城の山間
 小一箇の山寨を築き二百余人の麾下を集り近村近郷
 をあひやうへ海道小出ての旅人をを殺し火を放
 ち賊室を奪ひとり其行ひ暴悪なるものども其卓兎を知
 さんたるは縣令ゆも是を制し其のまに置玉ひらると
 小仏太郎はは夜二人の者を山寨へ引つと帰り佐和弥太を
 其の匠士の半小打ここち小笹を縛めを解せ精進とこと
 了捨らる正堂小引出し燈火をさうして能く小は是れ小
 沙二箇の美人唐土の飛燕楊妃小まさり彼武塔天神の墓
 ひあひく破利賊天女さるる又竹取の赫耶ひらゆるあさる

うと思入計りのほねひの小仏大郎まをくく見ん物忙然として
 居るううう漸々ふして間々うう押休の何処の者ゆて各々
 何と云のふと訊ねたれを小笹のつちり答て曰さう妻の浪速
 の御の農夫と作とのへる者の娘ゆて名を小笹と云ひ侍る
 今宵然うへん此琵琶法師の小あり途中ゆて彼さういひ小
 切引さぬ若う難為小及びを計くはも大王のさげめあ
 り御思の志を侍りとと泪をぐり小答へたゆび小仏元介
 と打らうひ我は山寨の裡の金銀賊宝山のどく何れまのぬ
 ち更怒りばよめまきう女今よりけ死ゆ止ぬり暮人が妻とま
 りて生産と樂むゆいり死や返辞とせよとぞ問ゆらうは時お

世心中の思入やう今今是を不世とのせりの渠又何ぞ免は
 べれや強て是を拒まんとはゆび殺さうより外にう死の命
 へと一かゝれど吾今空しく死ると死の彼黄金の難を佐和弥
 本が死持るうて盗賊の手小入り更誰ありて知者さう然い
 今よりけ盗賊の小吾身と任せ多日け死ゆ世一のびてをうと
 大規の謀計をゆては更を滝君小告まあせ縣令小誹へ
 させては山寨を亡び盗賊ともを扱めくせ黄金の難を
 再度滝君の手小飯るうて家の再自入うてさひあう然
 てのち死ると日又更ふ遅うくと心の底ゆ思ひ定め大郎小
 向の江戸のいやう斯不束るう妻ゆて御心ゆら小切のせあや

金葉家言卷之十

十一

長く御側小冊きて玉枕の座をさし侍りんと速く小云々
 小ぞ小仏太郎方の小喜怡それう早卒の酒宴をひく
 小笹をさるぐ待官さるぐ見小其夜を初めして小笹の
 小仏太郎と同じ齋ゆやゆり斯てのち小仏の小笹を愛に
 る更手の内の玉のごく夜の活業ゆも出やれば日毎小笹を
 相んとて酒宴のをも暮るる小笹の只管心をさした万
 望して滝五郎へは更を告やんと百般工夫をめぐり
 或時奥の室の床の間小ちのう一軸の仔細る山水の画を
 て小笹一邊の小賊小向のけ山水の何処の景色ゆやと問われば
 小賊答てそれのけ山寨の画圖めて侍の南の方の追手ゆ西の

方の搦手あり是の常道彼死の近きも爰よりい京へ近く彼
 死よりの難波へ近きと説く人々を小笹きく
 儲の妻が知ても更小益をたのめると打笑ひて止むる其
 次の日より小笹早卒の眼疾のうもひ出来て両眼ゆを
 流せしごとくは三女も病くと能は珠さ疼く堪がら双の
 の袖を顔小あて口の管たて止ざりたり小仏太郎もたの小
 秋心ひ思はるゆして言さると同じく心と悩まらるる甘夜小
 笹が云々やう妻豫てよりゆいとあり洛陽堀川のそり小
 環田高悦とら各送あり年若々れらの眼を治はるや
 妙をえらると因り願く大王は医師をよびて妻が苦を

金瓶梅詞話

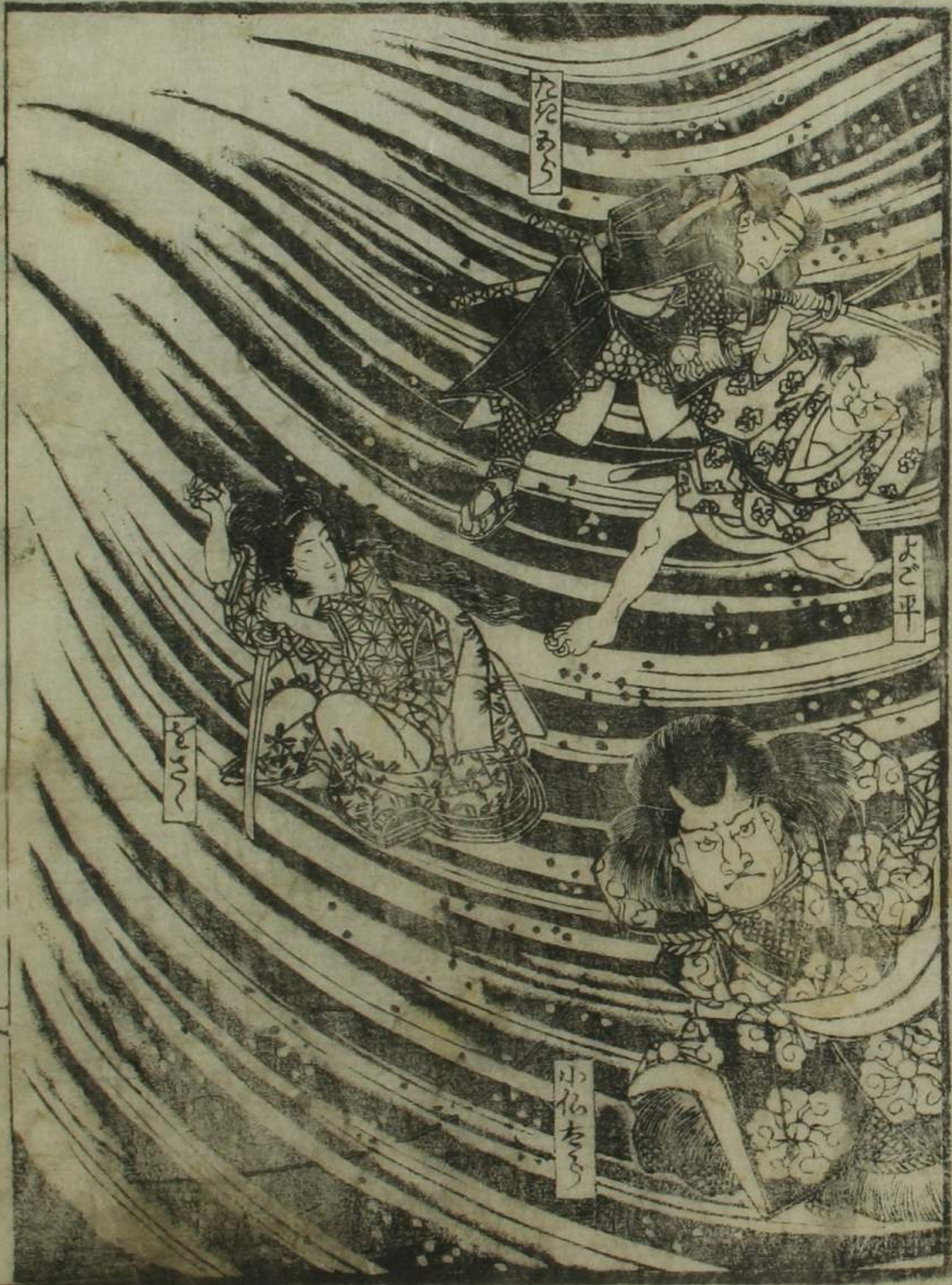
十

救ひぬくと云々ゆゑ小仏太郎と名頭て然れぬありの事大最良也
明夜ハ管は連来ん今日を遣ふとて主人より七八人の小賊ども
小僧付て次の朝の疾さより洛陽の方へぞつらつら

大滝七割 盗

爰ハ洛陽堀川の事なり小環田高悦とのハ医師あり年尚若
くして然れまでの名医との入るゆゑ有は或時日くれて窓の下
ハ燈光をうけ書まを誦て居る一処小早卒ハ四五人の
男ども一挺の大轡を具きて入来り吾們的岩倉の共將ど
の御内の者めて侍ハ唯今奥方急病小てとの迫ゆひぬ
覺くる先生今より直ハ御見舞ゆりゆとぞ曰くく小早悦

ゆめて急病とありが矢あそく不夫さくがとて衣服ども更こ
め茶運と大轡の裡ゆの甘方身ハ傷小乗うりのゆゆハ大男
傷七八人ろろく小ハ大轡を引くたて二里余り走り行る
が高悦余ハ小遠く覚えこれ何処まで行るぞと轡の裡ハ
ア訊るれども誰一人答へもえせ流々倉々なる山中と或時た
谷小くさる或時の峡とつら通夜ハ走りたるが道の事と十
里をうりも走りつらんと思ふた夜ハゆゆの事と明らかりて崔
く煥らるる一箇の山寨ゆのろろ大轡を山門より具ゆゆ
て庭上まで乗ませバ奥殿ハ盗賊の張本小仏太郎小賊
らと酒をさうりて居るが高悦が今乗轡より出ると見



山寨を破つ
 大滝が軍勢
 小仙太郎佐
 和弥太余吾
 平ホを生とる



て座を立て来り、可憐小謂て曰く、先生よ、このまゝ玉のり
もは程ど、妻眼疾、おて太く、惱まぬ、先生の眼疾を療
ふ、あ、小妙を、え、あ、ふ、と、ゆ、ぬ、疾、このを、治、し、め、つ、る、と
云々の高悦、是を、ゆ、て、漸く、心安堵、や、が、て、小笹が、病室、お、入、り、
病を、療、規、の、一、時、余、り、ほ、び、ぎ、て、出、来、り、太、郎、お、見、へ、て、言、々、や、う
令、室、の、眼、病、い、と、六、借、と、い、へ、ど、も、吾、家、の、秘、法、を、以、て、療、し、せ
べ、三、日、々、回、お、の、管、は、愈、し、侍、り、ん、と、受、合、け、る、太、郎、太、郎、お、う、ち
喜、び、ま、よ、う、酒、宴、を、と、の、へ、て、高、悦、を、め、と、ま、く、け、る、言、回、悦、を
某、日、の、う、一、日、お、三、度、づ、小、笹、が、閨、室、お、入、て、医、療、を、加、へ、ら、る、が
三、日、と、の、つ、る、お、小、笹、が、眼、疾、速、く、お、愈、て、原、の、ご、と、く、ま、り、け

と、お、太、郎、が、喜、怡、大、く、こ、ろ、こ、ろ、ほ、の、管、高、悦、が、妙、手、を、嘗、み、
又、も、酒、宴、を、催、し、け、り、け、り、た、高、悦、庭、上、お、出、て、山、の、根、く、こ、を
穿、ち、て、大、の、ま、る、花、草、を、掘、り、て、大、王、お、見、せ、け、山、深、山、ま、ぬ、が
極、め、て、某、品、を、考、へ、る、と、吾、明、日、の、山、深、く、尋、み、て、妙、草、を、採、り、
い、は、れ、と、云、つ、て、某、日、の、酒、お、て、ら、ら、う、次、の、日、高、悦、朝、ま、り、
た、の、り、身、軽、お、打、扮、某、を、と、ら、ん、と、山、深、く、分、入、ら、る、が、竟、お、
天、晚、お、及、べ、ど、も、帰、り、後、次、の、日、お、到、り、と、も、帰、り、ま、ら、る、は、太、
郎、太、郎、の、小、敷、馬、を、急、お、小、賊、と、し、て、山、中、を、尋、み、よ、さ、せ、ら、る、と、も、さ
ら、お、又、知、さ、ら、う、た、ぬ、が、借、り、高、悦、不、前、行、お、て、山、中、を、歩、た、猪
狼、お、や、食、ら、る、お、た、ん、太、不、便、ら、る、ま、ら、る、と、竟、お、小、其、の、伴、に、は、て

斯まで心を尽して計策を廻らして身と汚らざる
 吏を耻て竟ふ谷川に飛入て死するの通は烈女とのりる勤
 て滝五郎の二里をより山を下りたる時又一箇の川をこりたる
 背負ふる黄金の雑色を登て喰々る小ぞ不測の思ひ人まを
 して水底を捜させたるが果して小笹が死骸を引揚る滝五
 郎は打喜怡やがては死骸を浪速まで荷りせ飯の野辺の
 送るを活業とあて可啞ふさあひひく左門の佐の浪速お帰る
 佐和弥太と道八の二人を麻々拷問おろけたる小ぞ二人上の
 小陳がわく首めよりの悪吏一五二十のく自首おあびたる
 斯でろ小佛太郎を首とて佐和弥太道八ら重さ死刑に行はせ

て是れ小余五平が首をそへて泉木おろけて示衆せたる然して
 后滝五郎を叫びて今度副盗の隠拙を注進おあひび
 技群の手柄うとて去頃佐和弥太が没収する若千の書
 白をのこり滝五郎へ返してつらさゆ追放の罪も免さるる
 小ぞ滝五郎の原の豪家お立飯くて吾怡とくたりるまど
 も尚浪速へ飯は八幡ゆたきやうるる家居をいとまごころ
 くらわは暮々たる吾妻女の小笹が貞烈をかへ生屋滝五
 郎が正室とるは側妾おてくはけらるる小二人の男子を設
 け兄の井戸屋の跡目とる茅の浪速の家を往官吾妻屋が
 跡を起し兵庫の辰木が方より嫁をぬる最睦く栄え

たり淀の屋形小御座まは今の中持君の滝五郎が兄君の
て御座たる其後の音信と信の後の兄君の御執り
らひ小つ瀧五郎を耳した官人となり玉の追々官位可升進
て時勢多るそとゆゝ々々古仙も心を更めて原のこゝ井戸屋
へ御立入の身とさう洛陽の高悦浪速の古向無王官の忠作
ら何れも富る身の上とさう日々小敏系昌しつゝの最もめ
てはた又小そ有る

淀屋形金雞新話卷之十大尾

岳亭大人画作

淀屋形金雞新話

前五冊
後五冊

天保四年己丑孟春

江戸小傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛

司南傳馬町三丁目

中村屋幸藏

京三條富小路

近江屋治助

大阪心齋橋南久木町

秋田屋市五郎

書賈

